

「イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった(マタイ 2:1)」。世の救い主(1:21)、神の御子が生まれた大事件なのに、降誕の第一声が随分そっけないではないか。そっけなさはイエス御自身に対しても同じ。

「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた(2:11)」。神々しさとか、特別な偉大さがもっと語られてもよさそうなものなのに、ドラマチックなところがまるでない。

考えてみれば光の源そのものは表現しようがない。むしろ、光の当たる登場人物の方がくっきり色濃く現われる。ここでは、東方の占星術学者らを中心に物語が進んでいく。

学者らは西方に輝く星を仰ぎ見てエルサレムまでやって来た(2:1~2)。戦争か、飢餓か、人心の荒廃か、東の国にも苦しみがあったのだろう。学者らの思想や信仰では、希望が見いだせなかったのかもしれない。だから救いを求めて遙々旅をして来た。

そして遂に、遠望していた救いの星が(2:2)、目前の現実となった(2:9)。

「学者たちはその星を見て喜びにあふれた(2:10)」。「喜び」が内から溢れ出し、学者らを大きく震わせている様が想像できる。

彼らは家に入り「ひれ伏して幼子を拝み(2:11)」宝物を献じた。この作法を隠喩とするなら、彼らが信じていた正しさを手放した、とも解せる。救いの真実に「ひれ伏して」。

ひれ伏す学者らは「救いの信仰」に拘束されて主体性や自由を手放したのか。否、権力にしがみつく王や、王におもねる民こそ、主体性と自由を喪失して不安になっている(2:3)。その主体性なき恐怖の衝動が、おびただしい嬰兒虐殺を引き起こした(2:16)。

それとは逆に、異端とされている東方の学者らの淡々とした感じに注目したい。彼らの態度は私たちの手本となろう。キリストの体である教会が「何か息苦しく」なったら要注意。学者らのような「自由な柔らかさ」を折々の判断基準にしたい。

恐れて縮こまり、息苦しくなるような信仰は、信仰を我が物として曲解する王や民のそれだ。

学者らとて当初は、先入観の内であった。家に入って母と共におられる幼子を見(2:11)、あまりに「粗末な王」に期待裏切られる気持ちではなかったか。「ユダヤ人の王」が生まれたと星に教えられ、てっきりエルサレムの王宮にいると思込んで訪ねた(2:2)。そして彼らの普通の先入観が虐殺を引き起こすことになる(2:16)。

ところが、学者らは柔軟で率直であった。彼らは自らの喜びの衝動(2:10)に忠実であったがゆえ、貧しく粗末な救い主にひれ伏すことができた(2:11)。そして身に着いた馴染んだ思想信条を手放し(2:11)、晴ればれと「別道」を通って自分たちの国へ帰っていった(2:12)。

「ベツレヘムよ～お前の中から、わたしのためにイスラエルを治める者が出る。彼の出生は古く、永遠の昔にさかのぼる(ミカ 5:1)」。永遠の昔に出生した「王」の預言。

永遠なるメシア(救い主)の預言を教えられ(マタイ 2:6)、ヘロデ王はこれに従うどころか潰そうとした。また預言に精通した信仰の権威者たちも(2:4)、王が支配する世俗に堕ちたまま、真実の喜び「心の震え(2:10)」に目をつむっていた。

学者らは「喜びにあふれ(2:10)」、「幼子にふれ伏した(2:11)」。自らの「喜び」が彼らを導き、その喜びが権威や先入観を打ち壊した(2:11)。降誕の喜びに心震え、創造された自分自身に還りたい(2:12)。



《おまけのひとつ》

啓示たる聖霊の風は 心に吹き 自らの振動に気づいて御心に応える 教会の出来事にも風が吹く 私たちはその機会に柔らかに応じていきたい 算盤や見通しも大事だが 風に知らぬふりはできぬ